名古屋柳城短期大学

# ちゃぺるにゅーす

第14号

2007年12月20日

## クリスマスを迎えて

永見　勇

イエス様のご降誕をお祝いするクリスマスの季節がきました。私は、この時期を迎えますと、昔、一人の学生が私に投げかけた問いを思い出します。

「世界には多くの優れた歴史的人物がいるのになぜイエス・キリストが特別視され、その人物の誕生を世界中が祝うのか。」

クリスマスとは、「家族で楽しむ日」だとか、自分の愛する人と一緒に過ごしたり、プレゼントを贈る日という程度の理解が一般のクリスマス理解ではないでしょうか。しかし、私に問いを投げかけた学生は、クリスマスの意味を真摯に問いかけたものでした。この学生が問いかけた問いにここで答えることは出来ませんが、なぜ、キリスト者がイエスの誕生をクリスマスとして特別に祝うのかを少しばかり語りたいと思います。

キリスト教の起源は2000年前にユダヤのベツレヘムで生まれた大工の子、イエスの誕生から始まったことは確かです。新約聖書にイエスの誕生物語や生涯が語られていることは多くの人々の知るところです。キリスト者はこのイエスの生涯を受難物語として捉え、その内容を時代から時代へと語り継いできました。

イエスはまったく清い人でした。イエスは、当時のユダヤ社会で、希望をうしなった人に光を与え、ときに、私たちの想像を超えた奇跡の技を人々に授け、人々の痛みや病をいやしたことを聖書は伝えています。イエスは社会からほめられてしかるべき人でした。そのイエスが当時の権力者によって捕らえられ、神の冒涜者として裁判にかけられ、十字架の刑を言い渡されます。十字架の地であるゴルゴタの丘に赴く過程で、イエスは、信頼していた弟子たちからうらぎられ、人々から、つばをはきかけられ、むちをうたれながら歩みます。まさに、人間の受難と捉えてよい物語です。

イエスは十字架上で神に祈りながら、その厳しい状況に耐えました。そして、自分を十字架にかけた人々のために祈り、彼らが行った無知なる行為の許しを神に求めながらみずからの生命を終えるのです。この姿を一部始終眺めた人々がいました。イエスの一連の行為と言葉に驚きます。人間でありながら、この生き様は人間の行為としては理解しがたい。こうして、幾人かの人々が自然発生的にイエスは救い主、キリストであったとする言葉を発します。イエスはキリストであったという言葉が、次第に信仰告白として語られ、それが「イエス・キリスト」と表現されるようになったのです。

一方、当時のユダヤ人やローマ人のエルサレムの権力者たちは、社会を混乱に陥れたイエスが死んで埋葬され、これでようやく社会の混乱も収まると安心していました。しかし数日後、弟子達がイエスの墓を訪れたとき、そこにはイエスの死体はなく、白い衣を着たまぼろしがイエスの復活を伝えるのです。この復活物語が、キリスト教の理念を生み出す基本となったのです。

私たちキリスト者は、日頃、イエスを何か特別に偉い、強い存在として理解しがちです。しかし、その権威は人間の最も弱き状況を通して、あるいは全く理不尽な生活をそのまま受け入れることで、獲得された権威なのです。ローマの兵士が自分を捕らえに来たとき、みずから無力なる存在として、その不条理な状況をそのまま受け入れ、その生涯を終えたのです。イエス自らが、心貧しく、悲しい状況の中で生きたのです。

この生涯の物語は、その後、多くの人々、とりわけ、心の貧しい人々、悲しむ人々に未来への絶対的希望を与える物語として理解されることになりました。ですから、イエスの死と復活という語りを通して、私たち一人ひとりが神からの絶対的な希望と愛を送られたと理解できるのです。人がどのような厳しい状況に遭遇しようとも、大宇宙を司る究極的な力、神にすべてをまかすなら、イエスの生涯に示された神の愛が私たち一人ひとりに示されるという信仰が起きたのです。この希望のメッセージを生んでくれたイエスの誕生を祝うのはキリスト者にとっては当然です。また、世界の人々がイエスの生涯を通して希望の意味を感じ取ることができるなら、世界もイエスの誕生を祝うのは自然ではないでしょうか。

クリスマスおめでとうございます。

## クリスマス特集　クレメント・ムーアのサンタクロース絵本
### ―絵本が育てたサンタクロース―

クリスマスの前の夜には、不思議な期待感と魅力があります。凍てつく冬の暗く長い夜に、すべての小さい者たちに喜びをもたらす奇跡がおきます。もちろん、子どもたちにも。クリスマスの朝、子どもたちが目覚めると、暖炉に吊るしたくつ下が膨らんでいて、贈り物がつまっているという物語は、みなさんもご存知ですね。世界がもっとも暗くて寒いときに届けられた愛と喜び。それを運んでくるのが、サンタクロースです。

図１
『聖ニコラスの訪問』
（1931年）
アーサー・ラッカム画、
クレメント・クラーク・ムーア詩

図２
『聖ニコラスの訪問』
（1931年）
アーサー・ラッカム画、
クレメント・クラーク・ムーア詩

今回の特集では、古い絵本をめくりながら、サンタクロースの歴史をたどってみましょう。

トナカイの引くそりに乗って、世界中の子どもたちに贈り物を届けるサンタクロースは、もともと、キリスト教の古い伝承のなかに登場する聖人ニコラウスがモデルだと言われています。３～４世紀に小アジア（現在のトルコ）のミュラで司祭を務めた聖ニコラウスは、困窮のさなかにあった隣人の窓に金塊を放りこむなど、貧しい人や餓えている人たちを救ったと伝えられています。寒く暗いクリスマスの夜に子どもたちに贈り物を届けるサンタクロースのイメージにつながっていく聖ニコラウスですが、行いの悪い子どもに対しては厳しいところもあったようです。ドイツでもっとも古い絵本のひとつ『もじゃもじゃペーター』には、肌の黒い子どもをからかう子どもたちをインク壷に入れてまっ黒にする聖ニコラウスが登場します。

図３
『もじゃもじゃペーター』
（1845年初版）
ハインリッヒ・ホフマン作、
佐々木田鶴子訳

サンタクロースという呼び名は、アメリカで生まれたものです。聖ニコラウスの伝説をアメリカ東海岸に伝えたのはオランダ人開拓者たちでした。聖ニコラウスのオランダ語名「シンタ・クラース」がアメリカ風に発音されて「サンタクローズ」になったわけです。

1822年のクリスマス・イブ、ニューヨークに住む神学者クレメント・クラーク・ムーアが、自分の子どもたちのために、一篇の詩を書いて読み聞かせました。『聖ニコラスの訪問』（A Visit from St. Nicholas）という題の詩で、キリストの誕生を祝うクリスマスの前の夜、聖ニコラス（聖ニコラウスの英語名）が８頭のトナカイの引くそりに乗って空を飛んで来て、煙突から暖炉を通って子どもたちが寝静まった部屋に現れ、くつ下に贈り物を入れて立ち去る、という内容でした。翌年の12月には、この詩が新聞に載り、それ以来、クリスマスが近づくと、ムーアの詩は毎年のように新聞や雑誌に登場して、アメリカの子どもたちを夢中にさせました。

この詩に描かれた聖ニコラスのイメージこそ、今のサンタクロースの起源だと言われています。ムーアの詩によって、罰することなくすべての子どもに贈り物を届けるというサンタクロースのイメージが作られ、クリスマスは子どもが主役の楽しい家庭の祭りになっていきました。その後、ムーアの詩にトーマス・ナストなどのイラストレーターが絵をつけて、サンタクロースの絵本が誕生しました。

そのうちの一冊を紹介しましょう。1902年に登場した豪華なカラー印刷の絵本です。ムーアの詩にぴったりの絵を描いたのは、当

図４
『クリスマスのまえのばん』
（1902年初版）
クレメント・クラーク・ムーア詩、
ウィリアム・W・デンスロウ絵、
渡辺茂男訳
表紙

時アメリカ最高のイラストレーターと称えられたウィリアム・デンスロウでした。絵本のタイトルは、当時すでに子どもたちに親しまれていたムーアの詩の最初の言葉 'Twas the night before Christmasから取って、『クリスマスのまえのばん』（Denslow's Night before Christmas）となりました。

図５
『クリスマスのまえのばん』
クレメント・クラーク・ムーア詩、
ウィリアム・W・デンスロウ絵、
渡辺茂男訳
聖ニコラスと８頭のトナカイ

しかし、デンスロウが描いた聖ニコラスの服は、今日知られているようなサンタクロースの赤い毛皮の服ではありません。実は、ムーアの詩に登場するのは、赤い服のサンタではなく、「頭のてっぺんからつまさきまで、毛皮の服を着ていましたが、どこもかしこも灰だらけのすすだらけ」の聖ニコラスなのです。

図６
『クリスマスのまえのばん』
クレメント・クラーク・ムーア詩、
ウィリアム・W・デンスロウ絵、
渡辺茂男訳
聖ニコラスの服は赤くない

赤い服を着た太ったおじいさんというサンタクロースの姿を最初に描いたのは、ムーアの詩を絵本にしたトーマス・ナストだったと言われています。その後、20世紀のアメリカは「絵本の黄金時代」を迎え、ムーアの詩に、赤い服を着たサンタクロースの絵をつけた、たくさんの絵本が出版されました。同じ一つの詩をもとに、これほどたくさんの絵本が作られた例は、ほかにはありません。サンタクロースには、聖ニコラウスをはじめ、さまざまな伝承や神話の要素が入っていると言われていますが、それらを一つにまとめながら、子どもたちのためのサンタクロースというイメージへと育てていった最大の要素は、ムーアの詩の絵本だったと言えるでしょう。

ムーアの詩は、サンタクロースのイメージを作ったばかりでなく、クリスマスを子どもたちのための祭りとして祝うという新しい伝統をも作りだし、今でも多くの絵本を通じて愛されています。ターシャ・テューダーやリスベート・ツヴェルガーなど、現代を代表する絵本作家たちが、ムーアの詩を絵本にしています。

図７
『サンタクロースがやってきた』
（1991年）
クレメント・C・ムーア文、
グランマ・モーゼス絵、
倉橋由美子訳

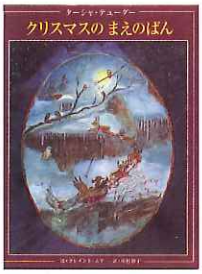


図８
『クリスマスのまえのばん』
（1980年初版、1999年改定版）
クレメント・クラーク・ムア詩、
ターシャ・テューダー絵、
中村妙子訳

図９
『あしたはたのしいクリスマス』
（1999年）
クレメント・ムーア詩、
モニカ・スティーブンソン写真、
角野栄子訳

図10
『クリスマスのまえのばん』
（2005年）
クレメント・クラーク・ムーア詩、
リスベート・ツヴェルガー絵、
江國香織訳

今年も、名古屋柳城短期大学図書館で、クリスマスの絵本を特別展示しています。ここで紹介した絵本も見ることができます。ムーアの詩に登場する８頭のトナカイの名前も、赤くないサンタクロースの服も、ちょっと厳しい表情の聖ニコラウスも、ぜひ、絵本を手にとって確かめてみてください。

村田　康常

## 水曜日の礼拝から

毎週水曜日の礼拝では、いろいろな方に講話をお願いしています。本号では、後期の礼拝の中から、お２人のお話をご紹介します。

### 10月10日　人を生かす愛

村田　康常 先生
（本学専任講師）

今日は、「互いに愛し合いましょう」（ヨハネの手紙一、4.7）という聖書の呼びかけについて、お話したいと思います。私たちは、「愛しなさい」と命令されたからといって、はい、そうですか、と簡単に人を愛することはできません。「互いに愛し合いましょう」という言葉を私たちは、どう受け止めたらいいのでしょうか。

私には、二人の子どもがいます。

長女は、出生時の体重が2200グラムという軽い子どもでした。生まれたばかりの頃は、母乳を飲む力も続かず、一度にたくさんの母乳を飲めなかったので、昼も夜も２時間おきぐらいに泣いておっぱいを欲しがりました。

それでも、赤ちゃんは、必死にお母さんの顔を覚えて、おっぱいを飲みます。赤ちゃんは、頑張って生きようとしているのです。そして、私たちは、赤ちゃんが必死に生きようとするのを助けてくれる、たくさんの人たちに出会いました。赤ちゃんを抱っこしてバスや地下鉄に乗ると、いつも決まって年配の女性が席を代わってくれました。乳母車を押して散歩していると、一人で歩いているときには決して声をかけてこないいろいろな人たちが、次々に、赤ちゃんに声をかけてくれます。町内会の用事で近所の家に電話をかけると、その家の奥さんの第一声は「何かあったの？手伝いに行きましょうか？」でした。子どもに何かあったんじゃないか、大変なら、すぐに手伝いに行きますよ、というのです。感謝しながら、ありがとうございます、町内会の用事です、子どもはおかげ様で今日も元気です、と答えました。

お母さんやお父さんは、自分の力だけで、赤ちゃんを育てているのではない、と感じました。他人の子どものために、見返りも求めず、無条件で助けてくれるようなたくさんの人たちに出会ってきました。さまざまな出会いのなかで、見返りなど求めない大きな愛が、この赤ちゃんを取り巻いているのだ、と感じられました。もし、そういう大きな大きな、かたちの見えない愛が、周りから助けてくれなかったら、私も妻も、この小さな小さな命を守りはぐくむことなんて、とてもできなかったでしょう。「愛は神から出るもの」だとヨハネは書いていますが、その通りだと思います。ひとりの子どもが成長していくところには、私たちの力を超えたものが働いているのを感じます。それは、「わたしたちが生きるようになるために」（ヨハネの手紙一、4.10）この世界のすべての人に働きかけている力です。

2007年11月１日
創立記念礼拝と墓地礼拝が行われました

自分のことを愛してほしい、という願いは誰にもあります。でも、それを超えて、見返りを求めずに誰かを愛するという愛も、あるのです。子どもたちは、そういう愛のなかで、いろいろな人に助けられながら、成長していくのだと思います。

私は、子育てを経験しながら、この名古屋柳城短期大学に来て、保育や子育て支援を学ぶみなさんと出会いました。どうか、みなさんには、自分たちのためにとか、見返りを求めて愛するのではなく、将来、出会うことになる子どもたちのために、「互いに愛し合って」ほしいと願います。この場所にも、私たちみんなが生きるように、成長できるようにと、そして、みなさんの多くが将来出会うことになる子どもたちみんなが生きるようにと、懸命に働いている目に見えない大きな大きな力が、働きだそうとしている、と信じています。

## 11月14日　心の強さとは何か？

小平　英志 先生
（本学専任講師）

私は心理学という学問で研究をしてきた人間です。最近、特に関心を持っている「心の強さ」について、森田療法の考え方を中心にお話をさせていただきたいと思います。

森田療法は日本の文化から生まれた心理療法です。主に神経症と呼ばれる心の病のために考案された治療法です。具体的に、どのような治療を行うかというと、１週間、患者さんを日常的な外の世界から遮断します。簡単に言ってしまうと、洗面や排泄などの人間の基本的な生活以外はできないような環境の中に患者さんを閉じこめるわけです。最初は不安や抱えている問題が何度も何度も頭にのぼり、悶々とした時間を過ごすことになりますが、その後に外の世界に出て、生活したいという欲望（生の欲望）が出てきます。そのうちに患者さんは散歩や簡単な運動を限られた時間の中で許可されます。ある程度の欲求不満状態の中で時間を過ごすことにより、生きることへの欲望をさらに高めていき、最終的には、不安な自分を振り返ることなく、生きるという欲望に従って自分を生かすようになるそうです。例えば、風邪をひいて、ただただ寝ていなくてはいけない時、学校にも行けない、友達ともしゃべることができない、マンガを読んでいたり、ゲームなんかしていたら親に怒られる。そんな状況では、普段何気なく当然のようにやっている行動がすごく貴重なものであると思えてきます。なにより健康であることをありがたく感じ、健康であることを当たり前と感じていた過去の自分をねたましく思うことさえもあります。同時に、元気になったらやりたいことが次々と頭に浮かんできます。こう考えると森田療法の目指しているものがなんとなくわかるのではないでしょうか。

精神科のお医者さんで森田療法の「あるがまま」をその人生で実践した人物がいます。岩井さんという方で、ガンの手術後、なんと激しい耳鳴りから左耳が聞こえなくなり、両目も見えなくなってしまいました。その時、岩井さんが考えたのは、目が見えない、耳が聞こえないということではなく、物事を考えることはできる、しゃべることはできる、ということでした。そこで、自分の得た知識や技術を伝える本を書きたいと考え、知人に協力を求めて、口述により執筆を行いました。なくしたものではなく、今ある自分の能力の価値を認め、目的に向かってそれを活用していくこと、これはまさに心の強さだと思いませんか。

ではどうすれば心は強くなるのでしょうか。一番大切なのは、自分のいいところ、自分にあるものに耳を傾ける、目を向けるということです。これがなかなか難しいのです。就職活動で自分のアピールポイントがなかなか書けない人が多いようですが、人間はどうしても悪い側面に目がいってしまいます。また、自分を評価しているのは自分だけではないんですね。自分の悪いところについて他人の目や声も気になってしまいます。こんな時に、大切なのが「自分をほめてくれた声」についての記憶です。くだらなくてもいい。とにかく過去に自分のいいところを見つけたり、人に言ってもらったりした経験を逃さず拾って、ストックして（貯めて）おくのです。私自身、先生という職業で、これまでのべ3000人の前で授業をしてきました。これだけの人間の前で話をしてきましたので、授業の最後に感想などを書いてもらうと、不満や不快感を述べる学生さんもいます。しかし中には授業を受けてよかったとか、面白かった、役に立ったといってくれる学生さんもいます。私にとっては、自分の授業を面白いと言ってくれる人がいるという経験や記憶が、自分の授業への文句や苦情に正面から向き合うことを支えてくれています。

ジョン・レノンがオノヨーコと出会ったエピソードで有名な「Ceiling Painting」という作品があります。部屋の中央にはしごがあり、天井から虫眼鏡がつり下げられているのですが、見物人がはしごに登り、虫眼鏡を使って天井をのぞくと、そこに小さな字で「ｙｅｓ」と書いてあるんです。「自分にはこれがある、これができる」といった自分の声、他人の声は非常に小さく見えにくいものです。日々の生活でこのような肯定の声をしっかりと拾って、しっかりと貯めていくことは非常に大事なことなのです。

## キリスト教Q＆A

**Q．クリスマス・ツリーは、いつ頃からあるの？**

A．クリスマスに彩りを添えるのは、サンタクロースを別にするとなんといってもクリスマス・ツリーではないでしょうか？今や日本中で早々とイルミネーション華やかなツリーが飾られ、その美しいツリーを見ると今年もクリスマスのシーズンがやってきた！と思わされますね。

さて、ツリーはいつ頃から存在したのでしょうか？ツリーの発祥はドイツと言われていますが、そのドイツでも定着したのは比較的新しい18世紀以降のことです。1737年のヴィッテンベルグ大学のG・キスリング教授の論文のなかに「人々は子どもたちのために部屋に木を立て、ローソクで飾り、木の下に贈り物を置いた」という記述がありますが、その最初は宗教改革を起こしたあのマルチン・ルターであると言われています。ルターは、ある年のイブの夜、空を見上げると満天の星の美しさに圧倒され、創造主の偉大な業を想い子どもたちのために再現したいと思いました。そして木に沢山のローソクをつけて星空に見立てたのです。ですから、最初のツリーは、ローソクの光だけのシンプルで素朴なものだったのです。ヨーロッパでは今でも他のオーナメントと一緒にローソクはよく使われ、木にローソクを付ける専用の器具も売られています。しかし、クリスマス・ツリーはルターよりもっともっと前、キリスト教が入る以前よりの民間信仰に影響しているとも言われています。それは、冬至の頃に限らず常緑樹を飾るという習慣ですが、これは戸口などに木を立てたり枝を飾ったりし、邪悪なものから家を守るというものでした。そこに花や実、りんご、麦わら、堅く焼いたパンを飾ることもあり、その一つひとつに意味がありました。今日でも、欧米の多くの人々はクリスマスシーズンには、生きた常緑樹にこだわり、美しい枝ぶりのもみの木を手に入れることからクリスマスの準備を始めます。クリスマス絵本のなかにもツリーを題材にしたものが数多く見られます。アンデルセンの童話の中にも「もみの木」というお話があります。ツリーを美しく飾ることは家族をひとつにする大切な行事なのです。私たちも、常緑樹（永遠の命を象徴する）の緑の美しさを生かしたシンプルな飾りを心がけたいと思います。

尾上　明子

（参考文献「クリスマスの招き」今橋朗、船本弘毅、松本富士男編、燦葉出版社、1983年より）

## クリスマス献金先

今年も、下記のところへ私たちの心を捧げたいと思います。特に、バングラディッシュのサイクロン被災者のために祈りましょう。

- バングラディッシュ・サイクロン支援
- アジア保健研修財団
- 笹島キリスト教連絡会
- 岐阜アソシア
- 日本国際ギデオン協会
- 国際子ども学校
- キリスト教保育連盟
- 聖公会保育連盟
- ひだまりの里
- 中部教区センター

2007年12月20日発行　第14号
発行所　名古屋柳城短期大学
名古屋市昭和区明月町2-54
編集兼発行者　名古屋柳城短期大学 宗教委員会
印刷所　株式会社　丸和印刷

この印刷物は再生紙を使用しています。